Osaka University Knowledge Archive

Title	屋内と屋外の自由遊び場面における幼児の遊び行動と仲間関係
Author(s)	廣瀬, 聡弥
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46609
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【17】

氏　　名	廣　瀬　聡　弥（ひろせ　としや）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　１９９６９　号
学位授与年月日	平成 18 年３月 24 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学　位　論　文　名	**屋内と屋外の自由遊び場面における幼児の遊び行動と仲間関係**
論文審査委員	（主査） 教　授　南　　徹弘 （副査） 教　授　釘原　直樹　　教　授　日野林俊彦　　助教授　中道　正之

論　文　内　容　の　要　旨

第１章　序論

最近は、身近に存在していた子どもの遊び場所が大幅に減少し、また、安全上の問題から子ども同士で遊ぶ機会も減少している。このような社会状況の中で、幼児施設としてどのような遊び場を子どもに提供するか、そして遊び場が子どもの行動にどのような影響を与えるのかを明らかにすることが、ますます重要になっている。しかし、遊び場としての環境が幼児の遊び行動や仲間関係に与える影響について、実証的に検討している研究は少ない。

幼児の遊びは日常の様々な場面の中で生じ、なんらかの出来事に触発されて突然始まったり、あっけなく終わったりするという特徴を持っている。既存の遊び研究では、場面を統制することによって少しでも遊びの変化性・変容性という特徴を排除しようと試みた。しかし、他児との関わりを含めた遊び行動は、様々な文脈の中で生じる。多様な遊び場面において、幼児がどのように行動を選択し調節しているかを調べることは、遊びや仲間関係を知るうえで、また幼児施設の様々な場面の持つ役割を知るうえで必要になってくると考えられる。

幼児施設において、幼児が遊ぶ空間は屋内と屋外に大きく分類することができる。屋内と屋外の遊び場面は、発達的・教育的視点から重要性が指摘されている（Davies, 1996；Naylor, 1985）。本研究の目的は、このような先行研究をふまえて、行動研究の立場から、屋内と屋外という物理的特性が異なる２つの遊び場面が、幼児の遊び行動や仲間関係にいかなる影響をおよぼすのかを明らかにし、ひいては幼児の行動発達に与える影響について検討することである。

第２章　屋内と屋外の遊び場面における幼児の行動の比較

【目的】

遊び行動に関する認知的分類、社会的分類、そして遊びの中で用いられる対象物による分類という３つの分類を用い、屋内と屋外の遊び場面において、それぞれの分類がどのように関連しあって遊び行動を特徴づけているかについて調べる。さらに、屋内と屋外において生起した遊びは、場面の持つ持徴に依存して決定づけられるのか、子どもが本来持っている遊びの傾向が場面の違いを超えて保たれるのか、それとも１日の生活の中で生じる遊び行動はそれぞれの場面の間でなんらかの関連性を持ちつつ変化するのかについて検証する。

【方法】

研究協力者は、大阪市内のY幼稚園に在籍している3歳児18名（男児9名、女児9名）、5歳児20名（男児10名、女児10名）の合計38名であった。観察は1回あたり連続10分間とし、デジタルVTRカメラを用いて撮影を行った。撮影を行う前に観察対象児を予め決定し、同一の幼児を対象として、同じ日に屋内と屋外の遊びの観察と録画を行った。

【結果および考察】

屋内と屋外の遊び行動を比較すると、3歳児と5歳児ともに屋内では会話やごっこ遊びといった、言語を伴うコミュニケーションを中心とした行動が多く、屋外では探索、対象の操作、身体的遊び、および移動といった位置移動を伴う遊び行動が多いという特徴を示した。また、3歳児は傍観や移動といった活動や身体運動を伴う遊びが多く、5歳児は何を作るかという目的を持ちつつ対象を操作する構成遊びを多く示した。

屋内と屋外における遊び行動の違いについて、Henniger（1985）やHutt（1989）は遊びに用いる対象物の違いによるものであり、屋内ではおもちゃが構成遊びを促し、屋外では固定遊具が身体活動を伴う遊びを促すと考えた。しかし、本研究において、5歳児は屋内でおもちゃを多く用いていたが、おもちゃは必ずしも屋内の遊びを規定するものではなかった。5歳児において屋内の遊びを規定する要因は、おもちゃよりも他児との言語によるコミュニケーションであった。また、3歳児は、他児とのコミュニケーションスキルが低く、おもちゃや素材といった対象物と関わる遊びが多く見られた。一方、屋外場面では、両年齢群ともHenniger（1985）の指摘する通り、固定遊具が身体活動を伴う遊びを促進していたが、同時に砂などの素材が構成遊びなどの様々な遊び行動も生起させた。

次に、幼稚園の1日の生活の屋内－屋外という時間経過の中で、幼児はどのような行動をしているのかを時間に沿って分析した。3歳児は、屋内で構成的な遊びを行い屋外では機能的な遊びを行う幼児がいる一方で、その逆の遊び行動を示す幼児がいた。5歳児は、屋内で相互交渉を行い屋外で平行的な遊びを行う幼児がいる一方で、その逆の遊び行動を示す幼児がいた。つまり、幼児は屋内と屋外という遊び場面の違いに応じて遊び行動を大きく変化させていた。

以上の結果から、屋内と屋外という2つの遊び場面において生起する遊び行動は、Henniger（1985）の示すように、屋内では構成遊び、屋外では身体的遊びというように場面の違いにのみ規定されるのではなく、幼児の1日の生活の中で遊び行動は、屋内－屋外という時間経過に沿って、行動上なんらかのつながりや関連性を持って変化していた。この時間経過に伴う屋内－屋外場面間の遊び行動のつながりや関連性を説明するうえで、幼児は遊びの中で現状の場面とは異なる新奇性を次の場面で獲得しようとする特性を持つと考える、Novelty Theoryに則して考えることが最も妥当であった。

第3章　屋内と屋外の遊び場面における幼児の仲間関係

【目的】

幼児の遊び行動の研究の中で、遊び相手の流動性や安定性に関する実証的なデータが乏しいのが現状である。Epstein（1989）は、幼児の遊び相手の選択要因として近接性が最も重要であると指摘した。近接性は幼児の遊び相手の他の要因である同年齢性や類似性と比較して、場面の影響を受けやすいものと考えられる。そこで、本章では、同じ施設内の屋内と屋外の遊び場面が、遊び相手の選択におよぼす影響について検証する。

【方法】

研究協力者は、幼稚園に在籍している3歳児20名（男児10名、女児10名）、4歳児18名（男児8名、女児10名）、5歳児20名（男児10名、女児10名）の合計58名であった。観察対象児は、各学年それぞれ2クラスから無作為に抽出した。観察は屋内と屋外の自由遊び場面において、対象児の社会的関わりと交渉相手を記録した。分析には交渉相手の流動性や安定性を測る指標として、生態学の分野で用いられているShannon-Wienerの多様性指数を用いた。また、各対象児の交渉相手の中で、交渉数が総観察回数の10%以上の相手を“仲良し”と定義し、仲間関係の分析に用いた。

【結果および考察】

3、4歳児は屋内と屋外で一度に関わる遊び相手の人数はほぼ同じだが、屋外においては多くの異なる相手との関わりが見られた。詳細に見ると、3歳児は交渉回数の多い相手である仲良しとの関わりが屋外で減少したのに対し、

4歳児は両場面において仲良しを中心として遊びを行うが、屋外では日頃の関わりの少ない相手との交渉が増えたために、遊び相手に多様性が生じることがわかった。他方、5歳児は、場面が異なっても交渉相手の多様性に差はなく、屋内と屋外のそれぞれの場面で特定の相手との関わりを持っていた。しかし、両場面において交渉回数がいずれも多い仲良しが存在する一方で、屋外においてのみ多く関わる仲良しが存在した。

以上の結果から、3、4歳児の遊び相手は遊び場面の特性からの影響を直接受け、5歳児の遊び相手は場面の特性に応じて選択されることがわかった。

第4章　遊び場面において他児との関わりを生み出す要因について

【目的】

第3章の結果から、屋外では屋内で関わらない相手との相互交渉が見られ、幼児の遊び相手の選択要因として近接性が重要であることがわかった。しかし、単に他児と近接している状態が屋内と屋外で異なるために、異なる遊び相手と一緒に遊んだのか、それとも他の要因が存在するのかについては、依然、問題として残る。そこで、本章では状況変数として考えられる、観察対象児と他児の社会的状態、対象児と他児が共有している場所、対象児と他児が保持している対象との関係から、相互交渉が成立する過程を調べる。

【方法】

研究協力者は、幼稚園に在籍している3歳児 17 名（男児8名、女児9名）、5歳児 20 名（男児 10 名、女児 10 名）の合計 37 名であった。観察は1回あたり連続 10 分間とし、デジタル VTR カメラを用いて撮影を行った。撮影を行う前に観察対象児を予め決定し、同一の幼児を対象として、同じ日に屋内と屋外の観察を行った。

【結果および考察】

まず、本研究から連続 10 分間の観察時間内において、3歳児と5歳児の両年齢群は屋内と比較して屋外において様々な相手との相互交渉が見られた。つまり、屋外の 10 分間の中でも、幼児は異なる多様な相手と関わり、第3章の1年間を通した仲間関係の結果と同様の結果が得られた。

遊び相手の選択に近接性が最も重要であるという先行研究から、第3章の結果は、屋内と屋外において他児と近接する条件が異なるために多様性が生じたと考えられる。しかし、本研究から、屋外の方が屋内よりも対象児の周囲に多様な幼児が近接しているわけではなかった。さらに、近接の時間が長いからといって、両場面で直ちに相互交渉に結びつくものではなく、特に屋内では長い時間、近接していても相互交渉へと移行しなかった。つまり、屋内と屋外において他児との近接の機会や時間の長さという近接条件が異なるために、相互交渉が成立したとは考えられない。

近接から相互交渉への移行、または相互交渉から近接への移行に着目すると、屋内では、他児と同じあるいは同じ種類の対象物を持っている場合、近接－相互交渉間の移行が屋外と比較して少なかった。一方、屋外における近接－相互交渉間の移行は、他児と同じあるいは同じ種類の対象物を用いた場合に多く見られた。つまり、屋外において、他児と同じあるいは同じ種類の対象物を用いた近接⇒相互交渉⇒近接⇒相互交渉……という近接－相互交渉間のショートサイクルが形成されていた。これは、2つの重要な側面を含んでいると考えられる。第1に幼児が同じ種類の対象物と関わることで、幼児は相互に同じ行動が生起しやすく、普段あまり関わることの少ない相手であっても、相互交渉へ移行するきっかけになっていると考えられることである。第2に幼児の遊びの中で、他児との社会的関係が近接－相互交渉間のショートサイクルの構造をとることである。つまり、屋内においては会話を中心とした遊びが多かったことからもわかるように、長時間、相互交渉を伴った遊びに、新たに別の幼児が加わるには、言語的方略が必要になってくると考えられる。しかし、遊びの中で他児との関わりに近接が繰り返されることによって、相互交渉の機会が生じるものと考えられる。本研究から、屋外において近接から相互交渉に至る過程を容易にしている要因は、幼児同士が保持している対象物の関係が重要であることがわかった。

第5章　総合論議

幼児にとって屋内は静的な活動を促し、屋外は身体的な運動を促すことが先行研究から示唆されてきた。そのような見地から、滑り台、ブランコ、ジャングルジム等の固定遊具を屋外に設置している施設が多い。しかし、屋内と屋外における遊び行動は、場面の持つ物理的環境特性によって決定づけられるだけではなく、促されやすいといった程

度のものであり、いかなる行動が生起するかは幼児の１日の活動の中で調節されていた。また、仲間関係においても、屋外には同じ種類の対象物が多く存在し、一度に多くの幼児が同時に関わることができるため、幼児は、屋内とは異なる、日頃関わることが少ない遊び相手と相互交渉を行う機会を得ることができた。このことから、場面の違いによって異なる社会的能力の発達を促す可能性があると考えられる。

様々な物理的特性を持つ遊び場面は、幼児の遊び行動を変化させ、多様な仲間との相互交渉を促すことが明らかとなり、このことは幼児の言語発達や社会性の発達にとってきわめて重要であることが明らかとなった。これらの知見は現在、および将来の保育所や幼稚園、あるいは幼児のための公園の設計にも大きく寄与するものと考えられる。

論文審査の結果の要旨

遊びは、霊長類や人間の社会的発達において重要な役割をはたしている。しかし、現在の日本における幼児の遊び環境は悪化しつつあり、幼稚園や保育園のような公的施設が、どのような遊び環境を用意するかはますます重要な意味を持ってくると考えられる。そのためにも、幼稚園などにおける幼児の遊び行動を手かがりとした遊び環境・場面の特性を具体的に明らかにすることが重要である。

本論文は、幼稚園の自由遊び場面における屋内（園舎）と屋外（園庭）の園児の遊び行動を次のさまざまの角度から詳細に分析し、屋内・屋外という遊び場面と遊び仲間関係の関連性を明らかにすることを目的としてなされたものである。３、４、５歳児を観察対象として屋内・屋外の遊び行動をビデオ撮影し、１．定性的かつ定量的な分類・分析、２．生態学で用いられる Shannon-Wiener の指数を用いた遊び仲間の流動性の分析、３．相互交渉に発展する仲間関係の分析、の各分析を行い考察を加えた。

これらの分析により、とりわけ屋外における幼児の仲間関係の流動性の発達や、比較的、長い時間を近くで遊ぶという仲良し友達の変化、相互交渉において同じ対象物と関わること等の重要性を明らかにした。屋内は構成遊びないし、会話中心の社会的遊び、屋外は身体的活動中心の機能的遊びといった先行研究の定型的な分析ではとらえられない知見をもたらした。

申請者は、本論文において独自の視点から幼児の社会的遊びを詳細・精緻に分析し、幼児の行動発達に新たな知見をもたらした。以上の理由により、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると認定した。